

彫刻の調査と研究経過

美術工芸研究室・彫刻

一、俊乗房重源の研究

俊乗房重源が東大寺の復興事業を推進するために諸国で働いた仕事の数々は、彼の南無阿弥陀仏作善

集にきわめて詳細に書き残されていて、その實際をいまによくうかがうことができる。ただその中で、いまの岡山県に含まれている備中と備前の兩國のことは、例えば作善集にも

備中別所 浄土堂

吉備津宮 神宮寺堂并御佛舎

庭瀬堂

備前国 常行堂

国府大湯屋

豊原庄豊光寺 湯屋

国中諸寺修造廿二所

とあるだけで、これ等がはたしてどこにあつたものか、あまり明らかにされていなかった。しかしこの重源研究においてはかなり早くから、備中別所をいまの吉備郡真金町にある吉備津神社の附近にこれを推定し、また備前常行堂をいまの御津郡一宮村の吉備津彦神社の境内にその遺址をたしかめ、さらにまた備前国府の大湯屋がいまの岡山市湯迫の浄土寺に該当するものであることをたしかめていた。しかしなおこの備中、備前兩國のことにはまだまだわからないところがたくさんあるので、三十五年度においては主としてこの兩國のことを調べてみた。その結果として、まず第一に吉備津神社にある十一面の善

薩面の中の八面は、いわゆる藤原和様の古い傳統をかなりよく伝えたものであるがやはり鎌倉初期頃の二十五菩薩来迎面の一部であることが推定され、したがってこれがおそらく重源による備中別所浄土堂に関する遺品ではないかと推察された。次の第二は、金山寺（岡山市金山寺）にかなり数多く傳つている古文書類で、この中に建久四年（一一九三）六月の金山寺住僧等解一通があり、これの袖書に重源自筆の外題と花押とがあることによつて、この金山寺が重源による「（備前）国中諸寺修造廿二所」の中の一寺であることが知られた。なお第三は、能満寺址（総社市黒尾新山）の鉄湯釜で、これは径六尺一寸余、高三尺五寸のきわめて大形なものであるばかりでなく、その恰好や造作が周防阿弥陀寺の鉄湯釜にひじょうによく似ていて、これがやはり重源ゆかりのものではないかということが考えられたわけである。これ等はたしかに重源研究に貴重な資料を加え得たものと信じて疑わない。

二、興正菩薩寂尊の研究

興正菩薩寂尊の研究も重源研究と同様にその研究対象がひじょうに数多いので、その基礎資料の調査だけにでもなかなかひまどるわけであるが、本三十五年度においてはほほ次のようなものを調査した。

聖徳太子像頭部内面（元興寺極楽坊）

すなわちその第一は、叡尊の本拠西大寺の大黒天立像で、この像は寺傳（行実年譜）によると、建治二年（一二七六）九月に仏師善春が叡尊の命によつて造つたものと傳えられているが、たしかにその様式は古く、例のあまり肥満していない、すつきりとした形姿をした大黒天で、作りもかなり写実的な、しかもきわめておだやかな手法をもつて、かえつて生彩のある表現をなしているものである。なおこの像にはその像内にかなり多くの納入物があるらしいの

で、次の機会にそれ等を調査することができるよう期待している。次の第二は、元興寺極楽坊の聖徳太子像で、これはこの像の修理に際して、その頭部内から玉眼のおさえ木その他に記された墨書や二基の小さな木造五輪塔などが見出されて、これ等によつてこの像が一削、叡尊ゆかりのものであることがたしかめられた。その第三は、小塔院（奈良市西新屋町）で、この寺にはかつて文永十年（一二七三）に叡尊の徒の良親や性海などによつて造られた清涼寺釈迦像などもあつたが、いまは見るとかけもなく寂れてはいている。しかしこの寺はなんといつても平安初期に護命僧正などの住した名刹であり、また中世に叡尊による真言律宗の教えをよく傳えたところであり、いまほとんど知る人もないが、ここはかなり数多くの中世の在銘石塔婆が放置されている。本年度はただそれ等の存在を確認した程度に止めたが、今後

大黒天像（西大寺）

機会を見て、更によくそれ等の石塔婆類を調査したいと思つている。その第四は、三重県下の律宗関係寺院で、これには無量寿福寺をはじめとして宝殿寺、不動寺、崇恩寺、長隆寺、佛勝寺、徳月寺、金仙寺、興典寺、福善寺等がある。そこで本年度にはこの中で無量寿福寺（上野市下沖口）と金仙寺（上野市比白岐）と福善寺（鈴鹿市玉垣町）との調査をおこなつて、多少の叡尊関係史料を見出した。これも今後の調査に期待するところが大きい。

藤原彫刻の研究

藤原彫刻の研究は、昭和三十一年度以降の研究によつて一まずその造立年次などがたしかめられる基礎資料の調査を終つたので、本三十五年度においては上として和様の形成にもつとも大きな要素となつたと思われる奈良地方あるいはそれに近い地域の藤原前期の作例をとり上げてみた。すなわち岩船寺の阿弥陀如来像をはじめとして、六波羅蜜寺本堂の薬師如来像、元興寺極楽坊本堂の阿弥陀如来像、法隆寺講堂の薬師三尊像、薬師寺の文殊菩薩像、浄瑠璃寺の薬師如来像、興福寺の板彫十二神将像等の如きものである。これ等によつて和様彫刻のもつ穏和な柔味のある表現というものが、様式史的にいかに発展していったものであるとか、そんな様式をつくり上げていく面の構成は、はたしてどんな造作を施し

ているかと、そしてそんな造型をもとめた時代の感覚を、その願主なり作家なりがどうして培ったかというようなことを考えてみた。これにはいますぐにここで結論を出すわけにはいかないが、もうすくし多くの類似作例の比較によつて、かなり面白い結果がでるのではないかと期待している。

四、鎌倉時代における院派仏師の研究

附 日本彫刻作家研究一般

当研究所における院派仏師の研究は、前にも述べたように、主として現存作例のある作家すなわち院賢、院範、院智、院農、院恵、院道、院信、蓮妙、院修、院湛、院唱、院亮、院玄、院命、定喜、院憲、院吉、覚舜、院興、定審等について、これをおこなつてきたのであるが、本年度においてはむしろこれ等作家達の史料を探究することにとめた。

なおこの研究に連関するものとして、嘉応三年（一一七一）に仏師仏忍が造つた湯川阿弥陀堂（奈良県西吉野村）の丈六本尊像や、いつ頃造られたものかわからないものながら、鎌倉の名匠快慶の手がけた正寿院（京都府宇治田原町）の不動明王像等を調査した。この中で快慶の不動明王像はその様式手法共にきわめて醍醐寺の不動明王像によく似ていて、これ等が同一作家の手に成つたものであることは、だれにでもすぐわかる。ことにその忿怒形としてややおとなしすぎる表現や、写実を巧みにこなした手法や、精緻をきわめた鍍金彩色などは、やはり快慶の特色をよく示したものと、いなければならぬだろう。なおこの像は快慶の直接の銘はないが、その台座に

右此本尊者安阿弥陀佛快慶之作也

然当寺五大院回縁之時御光并

悲々之

座令燒失畢仍後人被修造之

云々
委細記解別存之

去年寛正二年
十月十八日当院西屋炎上之

時御座并

火炎燒失之間則今年自卯月廿

七日奉修造之

寛正三年壬午五月三日 鬼作

法印権大僧都実濟四十六歳

記者権少僧都公海二十九

佛師 南都高天大貳好尊三十七

との墨書修理跡があり、とにかくこれでこの像を一応、快慶の作と押えることができる。そしてこの寛正三年（一四六二）にこの火災光背と悲々座とを補作したのが、南都高天（たかま）佛所の大貳好尊であつたことが知られるのも興味をひく。

五、その他の調査研究

1、笠寺調査

笠寺とは、いま竹林寺といひ、奈良県桜井市笠にある古刹で、世俗に笠荒神として知られている。この寺はかつて古く奈良時代に笠寺誓峯院と呼ばれたもので、一説には東大寺の開山良弁僧正の出生地とも傳えられている。この寺の本尊は像高六尺四寸八分の一木造りの薬師如来立像で、平安初期の彫刻としてかなり見るべきものであることは、すでに一部のものに知られている。この寺にまだすこし注意すべき文化財があるので、桜井市の要請によつて、それ等を一応調査した。その主なる品目は次の通りである。

- 一、地藏菩薩立像及納入文書
- 一、板絵三宝荒神画像（原像―鎌倉末カ）
- 一、板絵三宝荒神画像（元禄十年公慶開眼）
- 一、興正菩薩画像
- 一、閻魔十王図十幅
- 一、木板彩色不動明王画像（宝山湛海六十九歳 畫）
- 一、不動三尊画像
- 一、笠荒神誓峯山竹林寺来由記一卷（延宝六年）

如運)

一、古版木類

なおこの寺の鎮守笠山神社の神像は、興津彦神と興津姫神との一具像で、これが享保十七年(一七三二)に清水隆慶によつて造られたものであることが知られている。

2、元性院調査

元性院とは、京都府宇治田原町奥山田にある無名の小利であるが、ここに藤原時代の年記がある大般若経を伝えているとのことで、その住職佐藤寿宏師の要請によつてその一部を調査したが、たしかにその中には永治二年(一一四二)をはじめとして仁安二年(一一六七)、嘉応元年(一一六九)、治承四年(一一八〇)等の奥書があるものがかなりあつて、これはまた他日ゆつくりと調査をしなければならぬものだと思う。

3、西吉野村調査

この調査は奈良県吉野郡西吉野村の教育委員会の要請によつたもので、同村内の立川渡辻堂、正林寺(川岸)、圓光寺(陰地)等の文化財をごく簡単に調査した。この中で注意すべきものは圓光寺の定専上人坐像で、これは木造彩色、像高二尺六寸のまことに本格的な肖像であつて、造立もおそらく室町初期を下るものではないと思われる。したがつてこの像は真宗関係の肖像としても古く、またすぐれたものといわなければならないだろう。